北里柴三郎の生涯と適塾門下生

芝 哲 夫

大阪大学名誉教授

〒561-0852 豊中市服部本町 1-2-28

熊本の生んだ世紀の偉人北里柴三郎博士生誕 150 年を記念するこのフォーラムに、大勢の皆様の前でお話する機会を与えて頂きましたことを大変光栄に存じております。この話は今日ここに居られます前田浩熊本大学教授からお誘いがあったのですが、私は細菌学の専門家でもありませんし、北里研究所、北里大学の関係者でもありませんので、はじめは大変躊躇したのでありますけれども、北里柴三郎が世に出る契機が何度かあったが、それに不思議に適塾の出身者がいろいろ関わっている。そのことを話してくれと、前田教授からお話しがございまして、私はかねてから適塾のことを調べていますので、それならばとお引き受けした次第でございます。北里柴三郎の一生を縦糸にして、適塾の関係を横糸にして、柴三郎と適塾、緒方洪庵との接点についてお話をさせていただきますと思います。

北里柴三郎は明治 2 年（1869）に故郷小国から熊本に出て来て、当時の藩校時習館に入りましたが、その翌年には廃藩置県のために、時習館は廃校になってしまいます。柴三郎は一旦小国に帰りますが、その時に大阪兵学寮ができたと思うので、柴三郎はそこへ入って軍人になりたいと思うのですが、両親の強い反対に会いました。偶々、

その時にこの熊本の地に昔からあった医学校再春館が生まれ変わった古城（ふるしろ）医学校が開かれました。そこへオランダ人医学者マンスフェルトが長崎から招かれて来ることになりました。

長崎には安政 4 年（1857）からボンペというオランダ人医学者が日本人に医学伝習として西洋医学を教えていました。この後にボードウィンというオランダ人が来て、さらにその後任として来たのが、同じくオランダ人のマンスフェルト（写真 1）でありました。そのマンスフェルトが明治 2

写真 1. マンスフェルト

Tetsuo SHIBA
Life of Shibasaburo Kitasato related to Pupils of Ogata
Koan
Emeritus Professor, Osaka University

年（1869）に長崎での任期が切れることになりました。その時点で日本中に、外国人の専門医学者はこのマンスフェルトだけでありました。だからたとえば大阪などはマンスフェルトを招聘しなかったのですが、結局、熊本がこのマンスフェルトを呼ぶことに成功しました。よくぞ熊本の方々がマンスフェルトと呼ばれたと思います。勿論それまではこの熊本の地には外国人は誰も来たことがなかったので、熊本としては大変画期的な出来事であったと思います。

そのマンスフェルトが明治4年（1871）に熊本に来て、古城医学校が出発します。柴三郎は親の奨めで、語学を勉強するつもりでこの学校に入りました。実はマンスフェルトは日本語が全然喋れなかったのです。ここにマンスフェルトのオランダ語を通訳し、翻訳して生徒に伝える助教が二人いました。一人は阿蘇の西の日向町出身の高橋正直で、もう一人は山鹿出身の奥山静叔でした。奥山静叔の墓（写真2）は熊本市内の池田町の往生院にあります。熊本の方もあまりご存じないかと思いますが、実はこの奥山静叔が熊本の地で西洋医学を始めた最初の人と言ってよろしいと思います。

この奥山静叔と高橋正直の二人が大阪の適塾に入門していて、適塾でオランダ語を勉強してこの

熊本へ帰ってきていたのです。マンスフェルトのオランダ語を通訳したのはこの二人でした。奥山静叔は大変よく出来た人で、適塾でも初期の塾頭を勤めたくらいですから緒方洪庵の信頼も厚かったと思います。柴三郎は古城医学校でこの二人にオランダ語をはじめて学びます。柴三郎は後になってドイツ語でも語学的才能を発揮するのですが、既にこの時に適塾生二人に教わったオランダ語を一年くらいで見事にマスターしてしまいました。

明治6年（1873）当時の熊本医学校の写真（写真3）を見ますと、マンスフェルトのすぐ横に並んで柴三郎が立っています。その時既に柴三郎は学監となっていて、同期に入った生徒を教えているのです。マンスフェルトの信頼を得て、奥山と高橋に次ぐ助手に抜擢されていたのです。既にこの時から柴三郎の非凡の才能が発揮されていたといえます。

この後、柴三郎はマンスフェルトに、「お前は本当に医学者になる積りか」と問われた時に、自分は軍人か政治家になるつもりであると答えています。当時の柴三郎は、医者志の高い男子の仕事ではないと考えていたようです。マンスフェルトは決して柴三郎に進路を強要せず、しっかり勉強して自ら進むべき道を自分で見つけよという教育方針で柴三郎に対しました。そのマンスフェルトの熱意に打たれたのか、あるいは奥山の影響か、ある時柴三郎は顕微鏡で細胞標本を見ていて、医学の道こそ、男子一生の仕事としてやるに足ると悟り、遂に医学専攻の道を歩み出す決意をしました。

明治7年（1874）にマンスフェルトは任期が切れて熊本医学校を去ります。その後、マンスフェルトは京都の顛狂院—現在の京都府立医大の前身—へ移り、そこに暫く居て、その後、大阪府病院へ移ります。この大阪府病院というのは適塾の後身である大阪医学校の流れです。この大阪医学校の校長は緒方洪庵の息子の惟準で、現在の大阪大学医学部の源流になります。その大阪府病院へマンスフェルトが来て大阪の医学のために尽くしてくれます。この流れを逆行しますとやはり適塾になります。

柴三郎はマンスフェルトの奨めに従って東京に

写真2. 熊本往生院の奥山静叔墓

写真3. 熊本医学校の写真

中央の外人がマンスフェルト、向ってその左隣りが北里柴三郎、北里の前、右頬が隠れているのが奥山静叔、その右側、マンスフェルトの前が高橋正直。

出てきて東京医学校に入りました。その校長が長与専斎で、この人も適塾出身でありまして、緒方洪庵の分身ともいうべき、洪庵の医学上の最高弟でありました。マンスフェルトは熊本の前に長崎に居たと申しましたが、その時の長崎医学校の校長が長与専斎でありまして、師の洪庵の深い信頼を得ていました。ここで洪庵のことを紹介しておきますと、緒方洪庵（写真4）は天保9年（1838）から大阪に適塾を開きまして、多くの門弟を育てるとともに、西洋医学を日本に導入するために多くの蘭書を翻訳しました。その一つが『病学通論』で、これは日本で最初に病理学を紹介した書です。その中で洪庵は日本語としての医学用語を多く創作しています。その一つが「健康」という言葉です。われわれが日常使っている「健康」という言葉を作ったのは緒方洪庵でした。オランダ語の *Gezondheit* という言葉を健康と訳して、体の運営の常を衛るという意味であると注釈をつけています。その他、この本で現在使われている多くの医学用語を洪庵は造語しています。

この他に洪庵は大きな仕事をしております。この後でお話になる蟻田先生が先年 WHO で非常に努力を注がれて世界の天然痘撲滅を成し遂げられましたが、日本でその種痘を最初にひろめたのが

緒方洪庵でした。洪庵が種痘のために開いた大阪の除痘館の成績が際立ってよかったので、幕府は洪庵を江戸に呼んでお玉が池種痘所の延長としての西洋医学所を主宰させました。その西洋医学所の後身が先程申した東京医学校で、その校長が洪

写真4. 緒方洪庵

写真5. 長与専斎

庵の高弟の長与専斎（写真5）であったというわけだ。

長与専斎はまた洪庵亡き後、その遺志を継ぐがごとく、日本の医学のために大きい足跡を残します。日本の衛生学を確立したのみならず、わが国にはじめて医療制度を作り上げました。また「衛生」という言葉も専斎の造語でした。明治初年にヨーロッパを廻りドイツを訪れたとき、*Gesundheitspflege* というドイツ語がしきりに使われているのを耳にして、これに日本語を充てたのが「衛生」という言葉で、師匠の洪庵の「健康」の体の常を衛るという注釈を思い出して、この「衛」の字を用いたのだと思います。洪庵―専斎の師弟の流れがわれわれの現在の生活にも生きていることが医学の言葉の上からもわかります。

この専斎が校長をしていた東京医学校に柴三郎は入学しました。その3年後の明治10年（1877）に東京医学校は下谷和泉橋から現在の東大のある本郷に移って、東京大学医学部となります。その医学部の初代総理つまり医学部長がこれまた適塾出身の池田謙斎でした。柴三郎はこのように適塾門下生に守られながら学究生活を送ったといえます。

明治16年（1883）に柴三郎は東京大学医学部を卒業します。当時の医学士は日本中で数が少なかったから引き手あまたで、病院に勤めると月給は200円以上であったといわれていますが、柴三郎は月給70円で長与専斎の居た和泉橋の衛生局に就職します。これは柴三郎が長与専斎に傾倒していたためであると思われます。

その翌年の明治17年（1884）に、ドイツのコッホの処へ留学して最新の細菌学を習得して帰国し

た緒方正規が東大教授となり、柴三郎が居た衛生局試験所にも兼務します。そして当時の先端を行くコッホの細菌学を柴三郎は緒方正規から習うことになります。つまり緒方正規は柴三郎の先生ということになります。実は正規は熊本医学校では柴三郎の同級生でして、柴三郎は最後まで熊本医学校に留まりましたが、正規は早く東京へ出て、東大を卒業してコッホの処へ行って帰ってきたのです。

柴三郎はこの緒方正規に細菌学の手ほどきを受けます。この明治17年にコッホはコレラ菌をドイツで発見しています。したがってこの年に日本に帰ってきた正規は最新レベルのドイツ医学を日本にもたらしたのです。驚くべきことは正規から細菌学の手法を習った柴三郎がその3ヵ月後に東京麹町で発生したアヒルの病気からニワトリのコレラ菌を抽出証明していることです。ついでその年の9月には長崎に出張してそこで発生していたコレラ病の病原菌をわが国ではじめて証明確認しています。これはすごい腕だと思います。わずか半年ほどの修練で、真に一流の方法、技術を身に付けて成果を出したということに柴三郎の天賦の才能を感じます。

これを見ていた上司の長与専斎が、これはただ者ではない、早くコッホの処へ柴三郎を留学させたいと思います。しかし事は簡単には運ばず、既に中浜東一郎のドイツ留学が決まっていた。当時の日本は貧しかったので、内務省の費用では一人しか留学できなかったのを、専斎は奔走、斡旋して別枠の留学費を取ってきて柴三郎をコッホの許へ遣ります。この一事をもってしても、専斎がいかに柴三郎に肩を入れていたかがわかります。

柴三郎はこのようにしてコッホ研究室に入りましたが、はじめはコッホ先生にただドイツ語が上手い日本人が来たくらい印象しか持ってもらえなかったようです。その頃日本では緒方正規が当時日本で非常に蔓延していた脚気病の病原菌を発見したという報告を出します。当時は多くの病気は細菌の感染症であるという考え方が医学上の風潮となっていまして、しかも日本で最高の細菌学者の緒方正規が脚気菌を発見したのですから、日本の医学界や陸軍医務局などはみな一斉に

拍手を送ります。これをドイツで知った柴三郎がこれはどうもおかしい。細菌であるための3原則を満たしていないというので、この説を批判する文章を学会誌に発表します。このことが日本で大きい反響を呼びます。緒方正規は柴三郎の師である、その師に対して弟子が批判的な反論を出すとはけしからぬことであるというので、東大総長加藤弘之はこれは師恩を忘れた行為であると痛烈に非難します。陸軍医務局にいた森林太郎も柴三郎を評して「識を重んじ、情を忘れた行動である」という文章を出します。柴三郎の一本気な気持がここで日本医学界と衝突したのです。

私は多くの歴史上の人物を見るのに、このように他人から批判を受け、本人が非常に不愉快な思いをしたであろう事件に遭遇した場合に、その人がそれにどう対処したかを見ることでその人の格というか人柄がよくわかんと思います。柴三郎は後年のことになりますが、明治43年(1910)に緒方正規教授在職25年の祝賀会の席上で、門下生を代表して挨拶をしました。この時、柴三郎が門下生として挨拶をしたこと自身大変さっぱりした気持の行為だと思いますが、その挨拶の中で「私は機会があればかねてからこのことを是非緒方先生に申したかった」と前置きして「学問上の論争は師といえども、誰でも正しいことは正しい。間違っていることは間違っているとはっきり言うことが学問の世界である。私には全く私心ということがありませんでした」と言って過去のことを詫言いました。その後で「緒方先生は大変偉かった。それまで外国へ留学した日本人は皆知識だけ持ち帰ってきた。緒方先生がはじめて研究のし方を身に付けて帰ってこられた。日本に実験医学を最初に導入されたのは緒方先生である」と心からほめました。私はこの文章を読んで、柴三郎という人の心がよくわかる気がしました。明鏡止水というか、光風霽月というか、心に一点の曇りもない、からっとした人柄であったということが非常によくわかりました。

さてコッホ研究室での柴三郎の仕事については、嫌気性菌の培養にそれまで誰も試みていなかった水素を用いる装置を作って、はじめて破傷風菌の純粋培養に成功したことは非常に素晴らしいことであったと思います(写真6)。その前に

ゲッティンゲン大学のフリュッケが破傷風菌は他の菌との共生でなければ培養できないという説を出していて、それが常識になっていたのですが、柴三郎は他の好気性菌が酸素を消費した後の培養基の底に破傷風菌が生育していることを目ざとく認めて、この菌は酸素のないところで純粋培養できると見通しを立てていたように思います。この実験を始める前にコッホ先生にこの仕事をやらしてくれと申し出た時、コッホはうまくできればそれは細菌学者としての勲章になるとは激励したもののまさか成功するとは思っていなかったのではないかと思います。

柴三郎はこの仕事をコッホ先生に提言してから3ヵ月で純粋培養に成功していますので、提言をする前に柴三郎はある程度準備実験をしていて自信をもって申し出たのではないかと推測します。さらに柴三郎の偉かったのはその破傷風菌の純粋培養の実験の成功の後に、この菌自身が毒ではなく、菌から生産される毒素という化学物質が毒の本体であることを証明していることです。のみならず、その毒に対する人間の抵抗力、つまり現在でいえば免疫抗体が出来るということをつきとめて、遂に破傷風の血清療法まで確立しています。

この破傷風菌の純粋培養の仕事だけでも私は十分ノーベル賞に値すると思いますが、この一連の仕事を見ると、ノーベル賞の一つといわず、二つ、三つもらっても不思議でない気がします。コッホは柴三郎の仕事振りに驚いたと思います。同じ研究室でゲーリングがジフテリア菌の培養実験を行っていて、随分難儀しているのを見て、コッホ

写真6. 破傷風菌培養実験中の北里柴三郎

はゲーリングに柴三郎の破傷風菌の仕事の方法をジフテリア菌に応用してみろとアドバイスします。それによってゲーリングはジフテリア菌の培養に破傷風菌の培養法を用いて同じように成功します。

そして一つの報告に、北里とゲーリングが連名で、破傷風菌とジフテリア菌の純粹培養とその血清療法と題してドイツの医学会雑誌に発表します。これが後の1901年の第1回ノーベル医学賞候補の対象の論文になります。昨年の田中耕一氏のノーベル化学賞の審査の結果を見ても、最初の科学的原理または事実を発見した人にノーベル賞は与えられるべきだと思います。としますとこの仕事に対しては、北里一人か、あるいは北里とゲーリングの二人連名で受けるべきであると思いますが、事実はゲーリング一人が受賞しました。このことは私たち日本人はよく覚えておきましょう。柴三郎は第1回ノーベル医学賞を受けるに十分な仕事を確かに成し遂げていたことを。

その破傷風菌の仕事が完成する前に柴三郎の留学期間の3年が切れることとなり、さらに3年間延長しなければならなくなりました。この時、また長与専斎は大変心配して力になってくれました。専斎は柴三郎の仕事をもう少し続けさせなければ大成できないというので、新たな学資金の調達に奔走したがうまく行かないので、遂に皇室の御下賜金をお願いして、大変異例なことでしたが、当時の大金の1千円が皇室から柴三郎に与えられることになりました。柴三郎は感激してさらに3年間コッホ研究室での研究を続けることができたことによって、破傷風菌の仕事が完成を見ることができたのです。

柴三郎は都合6年間のドイツ留学を終えて、明治24年(1891)に日本へ帰国することになり、ドイツを出発し、途中イギリスのロンドンでの万国衛生学会に日本代表として出席しました。その時の写真(写真7)を見ると、消毒薬の研究で世界的に有名なイギリスの大学者リスターが前列中央に坐っていて、2列目中央にはこれまた免疫で有名なロシアのメチニコフがいるが、柴三郎はそのメチニコフのすぐ横に立っています。この写真の位置を見ただけでも、当時柴三郎が世界的に令名を馳せていたことがよくわかります。

写真7. 第4回万国衛生ならびに人口会議
前列左から3人目がリスター、中列右から4人目が北里柴三郎、5人目がメチニコフ。

事実、この時にイギリスのケンブリッジ大学から新しい細菌学研究所を創るので、柴三郎を所長に呼びたいという話がありました。またアメリカのブルックリン、ボルチモア、フィラデルフィアの各地から良い待遇で迎えたいという勧誘を受けました。これらの誘いを柴三郎はすべて断って、日本へ帰ってきます。それは柴三郎の心には、有難い皇室の御下賜金を頂いて留学できたから、早く日本へ帰って、日本の人のために尽くしたいという気持ちが強かったからで、明治25年(1892)に日本に帰国しました。

ところがこの偉大な細菌学者を日本はよう迎えなかったのです。東京大学も研究室を与えず、日本政府もすぐには援助の手をさしのべず、半年間柴三郎には研究の場がないまま無聊の日を送ります。これを見て、長与専斎は耐えられなくなって、自分の適塾時代の親友の福沢諭吉(写真8)に相談しました。諭吉はそれまで柴三郎に会ったことはなかったのですが、それを聞いて、日本の生んだ世界的学者を半年間も無為に過ごさせておくとは何事か、よし私財で柴三郎を救おうと、芝山内の御成門横の自分の私有地に10坪ほどの6室しかない研究所(写真9)を建てて、柴三郎に提供しました。これが最初の伝染病研究所でありました。これはすぐに大日本私立衛生会に委託され、またこの研究所の実験器具はそれまで柴三郎には未知の人であった貿易商森村市左衛門の厚意の寄付によってまかなわれました。

写真8. 福沢諭吉

写真9. 芝山内における最初の伝染病研究所

この研究所は忽ち狭くなったので、すぐ近くの愛宕下に新しい研究所が建てられることになった。この時、その周辺の芝区の住民や有識者が伝染する病気の研究所をつくることにこぞって猛反対しました。これに対して、福沢諭吉は論陣を張って、柴三郎を擁護して、結果的にはこの研究所が愛宕下に出来上がったのが第二代目の伝染病研究所でありました。

のみならず諭吉は自分の持っている三光町の土地を提供して、そこへ土筆ヶ岡養生園と自ら命名した結核療養所をつくって柴三郎に提供しました。しかもこの時、柴三郎は経理に疎い学者であろうからと、自分の高弟の田端重晟という者を経理の事務長につけて送り出しました。これは諭吉の柴三郎に対する親身の親切といわざるを得ません。このようにして柴三郎に日本での活躍の場が与えられました。

伝染病研究所ができた翌年に香港でペストが発

生しました。当時ペストはヨーロッパには発生していなくて、まだ純粋培養も行われていなかったもので、ペスト菌の研究の好機が柴三郎に訪れたのであります。その香港へ柴三郎と東京大学の青山胤通とその助手連が派遣されました。柴三郎は到着3日後に早くも世界最初のペスト菌の培養分離に成功しました。その直後にフランスのパスツール研究所のエルサンが来て同じ菌を発見しました。ところが柴三郎はこの時、一つの過ちをおかし、ペスト菌はグラム陽性菌であると最初は発表しました。エルサンはこれを陰性菌であると言ったのでありますが、その後、東大のグループによって、柴三郎のペスト菌は偽りで、エルサンの陰性菌が正しいという反論が出ました。後に柴三郎自身もこれを陰性菌と訂正しましたが、後年になって、適塾の流れを汲み、マンスフェルトが居た大阪府病院の後身になる大阪府医学校の校長になった佐多愛彦がヨーロッパへ留学した時、柴三郎とエルサンにより香港から送られていた菌の標本を再チェックしました。その結果、柴三郎の標本もエルサンの標本も両者同じグラム陰性の同一のペスト菌であったことを証明しました。ということはやはり最初にペスト菌を発見したのは北里柴三郎であったという名誉が回復したことになります。破傷風菌の純粋培養に次ぐ細菌の新発見という柴三郎の第二の細菌学上の偉業でありました。

この香港での調査旅行で、皮肉なことに青山胤通がペストに罹り重症に陥ったが幸いに回復して帰ってくることができましたが、その時福沢諭吉は柴三郎のことを非常に心配して、北里にもしペストがうつたら大変であると、多くの人びとに働きかけて、柴三郎を早く帰らせようと奔走しました。ここでも諭吉は本当に親身の配慮を示しています。しかし柴三郎はその後何週間か頑張って後始末を終えて無事帰国しました。

その翌年頃から、柴三郎の弟子となって細菌学の研究を志望する人が増えてきました。柴三郎の名声を聞いて集まってきた多くの俊秀の中から、後に米国に渡った野口英世、赤痢菌を発見した志賀潔、あるいはエールリッヒとともに梅毒の化学療法剤サルバルサンを発見した秦佐八郎、細菌学会賞にその名を残している浅川範彦など多士済

の俊秀が北里門下から輩出します。

ここでも注意しておきたいことはこれらの弟子の仕事は当然、師の北里の方針と指導のもとに行われたもので、志賀潔の赤痢菌の発見もそうであるが、その赤痢菌の学名を *Kitasatoe* としてもおかしくないところを弟子の功績を立てて、自分の名を全く出さずに *Shigarae* と志賀の名が学名になっていることです。浅川賞の名も弟子の浅川範彦の名を賞揚するために北里自身がこの賞を命名しています。性格が一見強引に見える北里にもそのような心温かい弟子思いの一面があったということ忘れてはならないと思います。

さて、その後は伝染病研究所はだんだん大きくなり、現在医科学研究所のある白金台町に移ります。大正3年(1914)にここで事件が起こります。当時の大隈内閣からある日突然、所長北里柴三郎に一言の断りも、予告もなしに、それまでは内務省の所管であった伝染病研究所を一夜にして文部省所属の東京大学の附置研究所に変えるとの通達が届きました。これは大変ひどい処置であったと思います。このことが世論の非難の波を巻き起こし、大隈重信の主治医であった東京大学医学部長の青山胤通の差し金であろうということで、東京大学と北里柴三郎関係者との確執ということになっています。

長与専斎の息子で後に東大総長になった長与又郎の日記『長与又郎日記』が昨年刊行されました。私は今回改めて読み直してみたところ、伝染病研究所が文部省へ移った時の経緯が長与又郎によって詳しく書かれています。又郎はこれの中ではっきりと、これは決して青山氏の陰謀ではなかったということを証言しています。私はこれを読んで一寸安心して慰められた気持ちになりました。つまり北里柴三郎と青山胤通の間には世間が言うほど、確執があったわけではなくて、お互い同士はやはり信頼し、尊敬すべきところは尊敬し合っていたのでなかろうかと思います。

しかし現実には北里は長い間かかって築き上げてきた伝染病研究が一夜にして大変化を受けるわけですから、それは耐えられることではなかった。柴三郎は即日辞表を提出して、部下の所員にはお前たちはここに残れ、自分だけ辞めればよいと言いましたが、志賀潔をはじめ多くの所員たちはそ

ろって所長の北里に続いて辞表を出し総辞職しました。

この時、また福沢諭吉の遺言ともいうべき言葉が生きてきます。諭吉はこの時には世を去っていたのですが、養生園を立ち上げた時に諭吉は柴三郎に向かって「政府というものはいつ何をやるかわからないから、足元の明るい間に独立する用意をしておけ」とまるでこの時のことを予言するような忠告をしていました。その通りのことが起り、養生園の運営で蓄積された金がこの時までには30万円ほど積み立てられていた私財を柴三郎は全額提出し、また世間の同情による募金も多く集まり、わずか1ヶ月にして、新しい北里研究所が設立されました。これが現在の白金三光町にあります北里研究所、さらにそれに続く北里大学、北里病院になるわけであります。

時間がなくなりましたので、この後に続く北里柴三郎が尽力した慶応大学医学部創設のこと、日本医師会のこと、済生会病院のことなどは割愛させていただきますが、私の話をお聞きになってお分かり願えたと思いますが、こうして見ると北里柴三郎は緒方洪庵の適塾と不思議な糸でつながっている気がしてならないのです。柴三郎は洪庵には一度も会っていません。けれども緒方洪庵は弟子たちに送る手紙の末尾に必ず決まり文句を記しています。それは「世のため、人のため、道のため」という言葉でありました。北里の一生を見ますと実にその通りで、世のため、人のため、そして細菌学という学問の道のために尽くしたといえ、洪庵の心と非常に通じるところがあります。だからこそ長与専斎、福沢諭吉がそれほどまでに親身の肩を入れて、柴三郎を助けたといえます。

私は北里柴三郎がもう少し早く生まれていたら、必ずや適塾に入っていて、緒方洪庵の薫陶を受けていたに違いないと思いますが、洪庵のともしたたいまつの火が洪庵の亡き後、柴三郎に受け継がれて行ったように思えてなりません。

最後に、柴三郎が一番影響を受けた学問上の師はもちろんローベルト・コッホであります。数日前の新聞紙上に、ドイツで最高の医学賞ローベルト・コッホ賞が今年は大阪大学の岸本忠三総長に与えられたと伝えられました。その前にこの賞を受けられた日本人は本日ご出席の北里研究所現

所長の大村智博士でございます。これをもってしても、コッホと北里を結びつける太い絆の流れは過去のことではなく、滔々として現在まで流れ続けていると実感致します。

どうかこの偉大な北里柴三郎を生んだこの熊本の地に、さらに第二、第三の柴三郎が生まれることを願っています。またこの生誕 150 年記念の年を期して、日本の若い人々あるいは細菌学に携わっておられる研究者の方々が柴三郎の心を受け継いで、これからまた新しい素晴らしい時代を築

いていかれることを心から期待いたします。そういう思いをこめて、拙い話をさせていただきました。ご清聴有難うございました。

(この講演は2003年3月29日に熊本における第76回細菌学会総会における北里柴三郎生誕 150 周年記念フォーラムとして鶴屋ホールにおいて行ったものである。講演の演題は「北里柴三郎博士をめぐる人びと」であったが、内容に即応するように改題した。)